

2021年4月18日 久宝教会 復活節第3主日礼拝

メッセージ「絶望の中に命の神はよみがえる」

牛田匡牧師

聖書 列王記 上 17章 8-24節

今回の聖書のお話は、ヘブライ語聖書から預言者エリヤの物語でした。舞台は紀元前9世紀の古代イスラエルです。預言者エリヤは、イエス様や弟子たちの時代には、ヘブライ語聖書に登場する預言者たちを代表する人物として理解されていたようで、古代イスラエルの民に神からの「律法」を取り次いだモーセと並び、山の上でイエス様の姿が光り輝いて変わった時に、一緒に現れて語り合っていた（マタイ17 並行）と記されています。「エリヤフ」というその名前は、「私の神はヤハウエ（命の神こそ、私の神）」という意味です。北イスラエル王国のアハブ王が、バアル神という異教崇拜に走り、政治的・経済的には大繁栄をする中で、格差は拡大し、弱者はますます虐げられ、社会正義は失われて行きました。エリヤはそのような時代に、弱者を顧みられる命の神ヤハウエの言葉と業とを、人々に告げ知らせました。

今回はそんなエリヤ物語の中から、「小麦粉と油が尽きない」というお話と「子どもを生き返らせる」という2つの奇跡物語でした。現実的にはそんなことはありそうにないお話です。今から2500年も前の人々が、更にさかのぼること400年前くらいの人々や社会のことを、物語として書き記しました。そこには現在の私たちが「これは歴史的事実だろうか、それともフィクション、創作だろうか」と考えるような価値判断はありませんでした。むしろ、多くの人々の口から口へ語り継がれて来た、いわゆる「おとぎ話」や「昔話」として理解されていたのだと思います。現代の私たちも「かぐや姫」や「うらしま太郎」のお話を聞く時に、竹の中から女の子が出て来たり、月に帰って行ったり、玉手箱を開けるとおじいさんになったりすることを、「歴史的事実かどうか」「科学的に説明できるかどうか」では判断することはしないのと同様です。むしろ、昔から語り継がれて来たそれらのお話が、それを聞く今の自分にとって、どのように感じられるか、どのような意味を持つかということこそが重要です。同じように、この聖書の物語もまた、預言者エリヤの奇跡のお話を通して、私たちが何を聞くかということが、問われているのだと思います。

今回の2つのお話は、続けて書かれていますので、場所も登場人物も同じ、サレプタのやもめの家でのお話だと思えますが、どうも元は数ある「エリヤ伝説」の中から2つの別々の物語だったようです。初めのお話の登場人物は、その日の食糧にも事欠く貧しいやもめの親子です。後半のお話では17節でわざわざ「女主人」と呼ばれ、その住んでいる家には、2階があ

りましたから、初めのお話に比べると、いくらかは豊かな女性が主人公となっています。そしてこのようなお話は、エリヤだけではなく、その弟子であったエリシャのお話としても、聖書の中に再び記されています（列王下4:1-7, 18-37）。ですから、細かい登場人物や場面設定はともかくとして、「このようなお話」が今から2500年ほど前の古代イスラエルの人々の間には、広がっていた。そして、口伝えで伝えられている間に、登場人物も場面も色々になって、お話同士のつながりも色々になっていった、ということなのではないかと思えます。

さて、一つ目のお話ですが、場面は「シドンのサレプタ」です。地図を見ると分かりますが、イエス様たちがおられたガリラヤ湖から更に北西、地中海沿岸にある異邦人の町でした。イスラエルにはエリヤの預言通りに大旱魃かんぱつが起り、ヨルダン川の東にいたエリヤの所では、水が涸れてしまいました。そこに主の言葉が臨みましました。8節です。「すぐにシドンのサレプタへ行って、そこに身を寄せなさい。私はそこで一人のやもめに命じて、あなたを養わせる」。そしてエリヤがサレプタの町へ行くと、そこで薪たきぎを拾っている一人のやもめに会いました。古代イスラエルの社会は男性中心の家父長制社会でしたので、女性は「〇〇の妻」「〇〇の娘」と呼ばれ、男性の所有物として見なされていました。そのような社会の中で、夫に先立たれたやもめかふ（寡婦）は、孤児や難民（寄留者）と並んで、身分を保証してくれる存在を失った社会的弱者の代表でした。そして喪服のような物なのか、詳しいことは分かりませんが、特別な服を着て（創世記38:14）、飾らず、粗末な衣をまとい、髪を整えず、香油を塗らなかつた（ユディト10:3-4, 16:8）そうです。そのために、エリヤのように町の外から来た異邦人から見ても、一目で「やもめ」だと分かったのでしょう。

エリヤはその女性に声をかけ、「私に水を飲ませて、パンを下さい」と言いました。ヨルダン川の東からはるばる旅をして来たエリヤは、空腹で喉も乾いていました。しかし、貧しいやもめは「私には、焼いたパンなどありません。かめの中に一握りの小麦粉と、瓶に少しの油があるだけです。…これから私と息子のために調理するところです。それを食べてしまえば、あとは死ぬばかりです」と答えました。「これしかありません。あとは死ぬばかりです」と言う時の、彼女の絶望はどれ程のものだったのでしょうか。しかし、そんな彼女に対して、エリヤは「心配は要りません。それで私に食べさせなさい。小麦粉も油も尽きることはないと言われ、それで私に食べさせなさい。小麦粉も油も尽きることはないと言われ、命の神ヤハウエのおかげで、彼女も子どもも皆が食べることが出来ました。

この女性にしてみると、「これだけしかない」という死を目前にした絶望の中で、それでもエリヤを養うことで、却って自分たちも養われた。その

僅わずかな物が、豊かに用いられて、却って増やされた、というのは、イエス様が子どもの差し出した5つのパンと2匹の魚という僅かな物で、何千人もの多くの人々が満たされたというお話にも通じているようにも思います。他人に与えることで、自分が与えた以上に与えられる。日本の諺ことわざにある「情けは他人のためならず」という言葉にも通じているかもしれません。

神様は人間の手を介して働かれます。「小麦粉が尽きない甕かめ」や「油の尽きない瓶かめ」というのは、底の方からそれらがどんどん湧いて出て来る魔法の甕かめや瓶かめというのではなく、それらが無くなると、いつも不思議と誰からか与えられて、結果として「無くなりそうだけど無くならなかった」ということの、神話的、おとぎ話的な表現こめびつなのだと思います。現代でも戦後の食糧難の時などに、祈っていたら、米櫃こめびつからお米が湧いてくる、などということは決して無かったはずです。あくまでも親戚や友人から分けってもらったり、農家と直接交渉して物々交換をして譲ってもらったり、闇市で仕入れたり、決して諦めることなく、様々な方法で食料を手に入れて、何とか食いつなぐことが出来た……。そのような綱渡りの生活を、後から振り返ってみた時に、「あの時、奇跡的に、食いつなぐことが出来たのは、確かに神様によって助けられていたからだ」と思えるのではないのでしょうか。

後半のお話は、病気になった女主人の息子をエリヤが生き返らせるお話です。預言者が「特別なお祈りや、おまじない、儀式をすると、死んだ人が生き返るのか」と言うと、勿論、そんなことはないはずです。もしもそうなら、この世界には大昔から今まで、生き返った人が山のようにいるはずで、このお話が私たちに告げていることは、一体何でしょうか。

一つ目のお話と二つ目のお話が、同じサレプタのやもめの家での出来事として続いていると考えるならば、彼女は「食べ物はまだこれだけしかありません。あとは死ぬばかりです」と言った後に、食べ物が尽きることはなかった、という段階で、エリヤが神様から遣わされた預言者であり、命の神ヤハウエによって自分たちは養かかわれ生かされている、ということに気付くことが出来たはずでした。にも拘わらず、彼女は、日々に与えられている恵みには気付かず、ある日、子どもが病気あやまになって亡くなってしまうという困難に直面すると、途端に「あなたは私の過あやまちを思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか」(18節)と言って、預言者を責め立てます。そして子どもを生き返らせてもらって初めて「たった今、あなたが神の人であることが、分かりました。あなたの口にある主の言葉は真実はばかです」(24)と言ってはばかりません。もっと早くに分かっていて当然なのに、分からない。神様によって生かされているのではなく、自分の力によって生きているのだと思い込んでいる……。この女性に示されている預言者に対する態度、神様に対する態度は、今を生きている私たちの中にも紛れも

なくあるのではないかと思わされます。

しかし、この女性は、子どもの生き返りと共に、自身も古い自分に死に、神様の働きに気付いた、神様と共に歩む「新しい生き方」「新しい命」を生きるようになりました。「復活のイエス様」に出会った弟子たちが、それまでの古い生き方から、新しい生き方へと歩み出したように、この女性も、そしてまた私たちも、新しい生き方、新しい命へと招かれているのだと思います。命の神は、絶望の中に現れ、働かれます。食べ物が底をつき「死を待つばかり」という時に、隣りの人の手を介して、働かれます。養うことで養われ、与えることで与えられ、互いに助け合うことで支えられます。

今、日本では今までにない程に、新型コロナウイルスの感染が拡大しています。大阪では連日、新規感染者数が1100人を超え、重症者を受け入れる病院はパンクして、在宅で入院を待機している人がその何倍もおられます。緊急事態宣言が出され、学校が休校となり、町の中にも電車の中にも人がほとんどいなかった昨年4月のことを思うと、何が正しい対処なのか分かりませんが、今一度、改めて、一人一人が「命を守る」ということについて、考え直す時が来ているように思われています。このどさくさの中で、オリンピックのことも、福島第一原発の汚染水海洋放出のことも、様々なことが、「命を守る」のとは反対の方向へと、<sup>な</sup>済し崩し的に進んでいます。一体、悪者は誰で、誰が真犯人なのか。どうしたらいいのか。私たちに出来ることは何か、もうどうしようもないのか。諦めるしかないのか……。様々なことが頭の中を駆け巡ります。けれども死を越えられる命の神、復活のイエス・キリストは、そんな絶望の中にこそよみがえられました。命の神は絶望の中によみがえる。絶望の中に命の神は働かれる……。今も、私たちがこうして命を与えられて、生かされているということは、そこに命の神の奇跡が働いているということです。決して当たり前ではないその事実<sup>うた</sup>に改めて気づき、命の神、復活のキリストと共に歩む道へと招かれて行きましょう。

今日は賛美歌として、アイオナ共同体の賛美歌を選びました。「アイオナ共同体」というのは、スコットランドの西にあるアイオナ島という小さな離島にある元・修道院を修復した信仰共同体だそうです。そこでは現代社会が抱えるさまざまな問題と取り組みながら、自分たちが祈るべきことを詩にして、いくつもの賛美歌を生み出して来ました。この後に歌います「みんな輝く日が来る」の中では、「神の国では、みんなが変わるはずだ」と歌われています。私たちが強い者として、持てる者として、他人に与えるのではなく、むしろ「貧しい人から学び」「弱い人と共に歩み」、特別な人たちだけではなくみんなと共に「杯をかわして、共に喜ぶ」のだと歌われています。是非そのことを心に留めて、ご一緒に歌いたいと思います。